

Vの形に関わる: 時制・助動詞・仮定法・受動態

文型の構造を壊す「特殊構文」
倒置、挿入、強調、省略

文の(主要)要素
(文の中での語句の役割)

この二つを区別しよう。

品詞
(単語の種類)

S V O C M

名

動

形

副

限定用法(M)
1語なら名詞の前
2語以上なら後ろ
から修飾する

叙述 用法

S: 主語。動作する人・物・事。
V: 述語動詞。文の中心になる動作。
O: 目的語。動作される人・物・事。
C: 補語、主語や目的語を「補い」、それが、「どういふものか」、「どういふ状態か」を説明する。
↑以上が文の「主要」要素

M: 修飾語、他の部分を「飾」るもの、なくても文が成立するため、文の主要要素ではないと言われる。

副: 副詞。形容詞が名詞を修飾するのに対し、名詞以外、主に動詞を「修飾」する語をすべて副詞と呼ぶ。

句
(2語以上の単語のまとまりが、一つの「品詞」として働くもの)

主に「準動詞」。
同じ色付きのものは
しっかり「識別」しよう。

・to V ... (名詞用法)
・Ving... (動名詞)

句動詞 (put on, take off など2語以上で一つの動詞と見なせるもの ← 「句」の定義に合う)

・to V ... (形容詞用法 → 限定用法のみ)

・to V ... (副詞用法)
・Ving... (分詞構文)
・V p.p.... (分詞構文)

準動詞: 「to不定詞」「動名詞」「分詞(構文)」は全て「準動詞」と呼ばれる。「準動詞」とは、「動詞」の形を少し変えて、「動詞」以外の品詞の働きをさせたもので、「動詞」に「準ずる」ものであるため。

・疑問詞 + to V
[where to V, when to V, who(m) to V, what to V, how to V, which to V]

・Ving... (現在分詞: 能動的)
・V p.p.... (過去分詞: 受動的)
・前置詞 + 名詞 (前置詞の目的語)

・前置詞 + 名詞 (前置詞の目的語)

節
(句の定義を満たすもののうち、中にSVを含んでいるもの)

主に「接続詞・関係詞」。
同じ色付きのものは
しっかり「識別」しよう。

・接続詞 + SV
[that SV, whether SV, if SV]

・間接疑問
[what (S)V, who (S)V, which (S)V, when SV, where SV, why SV, how SV]

・関係代名詞 what [what (S)V]

・複合関係代名詞
[whatever (S)V, who(m)ever (S)V, whichever (S)V]

・関係代名詞 + (S)V (名詞欠如文)
[which, who(m), that, whose, as, but, than...]
(制限用法 = 限定用法, 非制限・継続用法 = 叙述用法)

・関係副詞 + SV (完全文 = 副詞欠如文)
[when, where, how, why, that]

↓ 普通は名詞節と扱われるが、名詞を修飾しているように見えるため、ここでは形容詞として扱う。
・同格の接続詞 that + SV (完全文)
[the idea that, the belief that, the fact that 他]

・接続詞 + SV
[because SV, when SV, if SV, whether SV, so that, so...that 他、多数]

・複合関係詞代名詞・副詞
[whatever (S) V, who(m)ever (S) V, whichever (S) V, wherever SV, whenever SV, however SV]

先行詞が省略されると名詞節に



英文法の地図 V.7

★英文解釈のためのいくつかの覚書 Ver.1

※以下の文書に不明点があれば、修正しますので、すぐに教えてください。

☆英文解釈の基本原則と基本視点

①英文は、稀な例外を除いて、五文型に帰着させることで、その意味を理解できる。常に文型を意識し、分析せよ。

②文型分析の基本的視点は、語句の「品詞」と「位置」、つまり英文の「形態」であり、それを根拠として、それらの語句の文のなかでの「役割 (SVOC…)」を特定し、文型を明らかにすることである。この点を図示すると… (図の→は「根拠づけ」関係を表す)

英文の「形態」の分析→→→文の「要素」と「文型」の特定→→→英文の「意味」の把握

↑←←←←←←←←←←←←←←↓

↑この「意味」から「要素」と「文型」を根拠づける回路は、「形態」だけでは文の要素と文型を特定できない特殊な場合にのみ用いる。つまり、普通は用いない。

この「意味」に基づく判断を「文脈判断」と呼ぶ。

③あらゆる文型はSVから始まる。文で「最初に出てくる (位置の観点)」「前置詞のついていない名詞 (品詞の観点)」をSと見なし、その「後ろに (位置の観点)」、それに対応するVとなる「動詞 (品詞の観点)」を探すのが基本姿勢。

④Vによって、その「後ろ (位置)」にとれる文型は決まっている。しかし、複数の文型を取れる動詞も多いし、また自分に動詞についての知識が欠けている場合もある。その場合には、Mを取り除いた上で、①Vの「後ろ」にある要素の数 (0個→SV、1個→SVC・SVO、2個→SVOO・SVOC) ②要素の品詞 (OにもCにもなれる名詞 or Cにしかたない形容詞) ③要素の相互関係 (SやOとイコール関係にあるかないか) から、逆算的に文型を特定せよ。

⑤各品詞と文の要素との対応関係、各品詞の注意点。

・名詞は、原則的に、S・O・C、前置詞の目的語、前の名詞に対する同格的説明、副詞 (いわゆる副詞的目的格)、Vingが省略された分詞構文の補語相当部分か主語相当部分のどれかとして働く、名詞が出てきたら必ず、その働きを以上のどれかから特定せよ。

・動詞はVになる。ただ、to V・Ving・V p.p.は、動詞としてではなく、名詞・形容詞・副詞として働き (準動詞)、その品詞に応じた役割を担うので、どれとして働いているのかを必ず特定せよ。

・形容詞は、名詞を直接的に「修飾」する限定用法 (M) と、Cになる叙述用法との二つの用法を持つ。形容詞が出てきたら必ず、どちらの用法か明確にせよ。

・副詞は名詞以外を修飾する修飾語 (M) となり、文の要素 (SOC) にはならない。副詞は修飾先を明確にせよ。

・前置詞は、後ろに出てくる名詞 (前置詞の目的語) とともに句を形成するが、それは、原則的に、名詞を修飾する形容詞句か、動詞等を修飾する副詞句として働く。修飾先を特定し、形容詞句なのか副詞句なのかを特定せよ。

⑥英文は五文型に還元されるという意味では単純だが、文型の「重層化」と「変形」とでも言うべき事態によって、英文はそれなりに複雑化される。「重層化」とは、準動詞や節を通じて、文型の一部、つまり、SやOのなかに、また動詞・文型・文が埋め込まれる事態を言う。「変形」とは、関係詞や疑問詞等の使用における文の要素の移動や、文型に関する倒置 (MVS、CVS、OSV、SVCO)などを指す。「重層化」と「変形」を見抜けるようにしよう。

⑦「節」を作る語については三つの視点から捉える必要がある。

(1) その語が作る節が、外に対して、どのような役割を担うか、つまり、名詞節なのか、形容詞節なのか、副詞節なのか。この点については「英文法の地図」を参照せよ。

(2) その語が、自らが作る節の内で、どのような役割を担うか。接続詞は自らが作る節のなかでは何の役割も果たさない。それに対して、関係代名詞や疑問代名詞は、自らが作る節のなかで名詞の代わりの役割を担い、それゆえに、節内では名詞が欠けており、SOC・前置詞の目的語等の重要な要素が欠如することで、節内は不完全な文となる。また、関係副詞や疑問副詞は副詞の役割を担う。だから、これらの節内では副詞が欠けているが、副詞はあくまでMなので文として不完全というわけではない。

ところで、関係副詞は何節を作る？と聞かれて、副詞節！と答える人がいますが、これは(1)と(2)の観点を混同しています。「関係副詞」の「副詞」は(2)の観点で言われていることであり、(1)の観点からすれば、関係副詞は名詞を修飾する形容詞節です。

(3) その語自身はどんな意味を持つか。例えば、関係代名詞 **what** は「もの・こと」という意味を持ち、接続詞 **because** は「…なので」という理由の意味を持つ。

⑧「重層化」について、もう少し詳しく言及しておく。英語の文型はS・V・O・Cの四つの要素から成り立つ。だが、**What is important is to study hard.**というような例文を考えると、ここで全体はSVCの第二文型だが、Sは関係代名詞 **what** が作る「名詞節」であり、Cは名詞用法のto不定詞が作る「名詞句」であって、そのうちに動詞を、ということは、文型の構造を含んでいる。実際、**what is important** はsvcであり、**to study hard** は(s)vmである。つまり、全体は第二文型だが、主語Sのなかにも第二文型SVCがあり、補語Cのなかには第一文型SVがある。このような重層構造を的確に把握すること、すなわち、文全体に対してのみならず、あらゆる句と節に対して文型の思考を適用することが重要である。

⑨「変形」についても、もう少し詳しく言及しておく。文型はすべて「能動態」の「平叙文」を基準に考えられているが、これに当てはまらないものは、受動態にせよ、疑問文（間接疑問・関係詞等も同様）にせよ、命令文にせよ、感嘆文にせよ、すべて能動態平叙文のシステムティックな「変形」として理解できる。「変形」の視点は、こういった各種の文のあり方を、基本文型の「変形」として把握し、それを基本文型に還元して理解する道を開くものであり、英文理解にあって決定的に重要である。

☆「英文法の地図」の読み方——道に迷わないための「地図」、でも、それが読めなかったら意味がない！

・「英文法の地図」は上中下、大きく三つの行に分かれている。一番左の列に各行のテーマが示されている。一番右の列は用語の定義をまとめている。分からない言葉については右側を参照しよう。

・三つの行のなかでは「文の要素」と「品詞」と「両者の対応関係 (→)」を扱う一番上の行が最も重要である。ここを基礎にして、下二つの行、「句」と「節」を扱う行へと進んでいく。英文解釈では、英文の文型を把握することを基軸として英文の意味を捉えていくが、文型の判断では単語の「品詞」と「位置」が判断根拠として決定的に重要である。例えば、英文解釈ではまず、「文の最初に出てくる (位置)」「前置詞のついていない名詞 (品詞)」を S とみなして、その「後ろ (位置)」に、S に対応する V となる「動詞 (品詞)」を探す。このような思考過程において「品詞」と「文の要素」との対応関係 (言い換えれば、「品詞」の用法) を知っておくことは決定的な前提である。各品詞の用法について詳しくは、「☆英文解釈のためのいくつかの指針」⑤を参照せよ。

・一番上の行は、矢印によって、「名詞」は SOC と「前置詞の目的語」になり、「動詞」は V や各種「準動詞」になり、「形容詞」は C か、名詞を修飾する M となり、「副詞」は名詞以外を修飾する M となることを主張している。

・二行目と三行目は、それぞれ「句」と「節」を取り扱う。「句」の定義が決定的に重要である。句とは「二語以上の単語がまとまりとなって一つの品詞として働くもの」である。節は、句のうちで、その中に SV を含むものである。ポイントは「一つの品詞として」ということであり、だから句と節のボックスからは「品詞」に向けて矢印が出ているし、句や節は、その働きに注目して、「名詞句・名詞節」「形容詞句・形容詞節」「副詞句・副詞節」などと分類される。他方、句や節は、それがどんな「品詞」等によって作られるかに注目して、「動名詞句」「To 不定詞句」「前置詞句」「関係詞節」「接続詞節」などとも呼ばれる。この二つの呼び方の着眼点の違いを意識する必要がある。例えば、地図を見れば分かる通り、動名詞句は名詞句であり、To 不定詞句は、名詞句・形容詞句・副詞句のどの可能性もある。

・「句」や「節」が重要なのは、それが文型の構造を重層化するからである。名・動・形・副がそれぞれ様々な仕方で SVOCM の役割を担い、文型を織りなしていただけなら、まだ話は単純である。だが、「句」や「節」が示すのは、例えば、「名詞」として働けるのは「名詞」だけではないということである。名詞句や名詞節を作り一群の単語たちが存在するのだ。そして、私がこれを「重層化」と名指すのは、節の場合は V を含むのが定義からして当然として、さらに、句の場合でも、それが準動詞句であれば、そのうちに本質的に動詞を含んでおり、ということは、そこには文型の構造が存在するからである。五文型は、句や節が存在することで、自らの一部にさらに文型の構造を含む「重層的」なものになる。私たちは句や節に習熟して、この重層性の構造を見抜けるようにならなければならない。

・「句」や「節」でポイントとなるのは「識別」である。例えば、Ving なら動名詞・分詞・分詞構文という形で見たい目は同じなのに用法が異なるので、それを識別しなければならない。この識別法を例外なく定式化することは困難なので「ヒント」という形ではあるものの、とりあえずの整理をしたので、「☆注意を要する単語たち」を参照のこと。

・真ん中の行は以下のことを主張している。名詞句として働くものには、動名詞、To 不定詞、疑問詞 + To 不定詞がある。形容詞句として働くものには、To 不定詞、分詞、前置詞句がある。副詞句として働くものには、To 不定詞、分詞構文、前置詞句がある。ここで To 不定詞 (名詞・形容詞・副詞用法のどれか)、Ving (動名詞・分詞・分詞構文のどれか)、前置詞句の用法 (形容詞的か副詞的か) の識別が極めて重要である。この識別法を例外なく定式化することは困難なので「ヒント」という形ではあるが、とりあえずの整理をしたので、それについては「☆注意を要する単語たち」を参照のこと。

・一番下の行の左の列は以下のことを主張している。名詞節として働くものには、接続詞 **that**・**if**・**whether**、疑問詞節（いわゆる間接疑問）、関係代名詞 **what**、複合関係代名詞 **whatever**・**who(m)ever**・**whichever** がある。

・ここで問題になる識別は、この「名詞節を作る接続詞の **that**」を、形容詞節を作る関係代名詞 **that** や同格の **that** とどう区別するか、接続詞 **if**・**whether** を副詞節となる用法とどう区別するか、間接疑問を作る疑問詞たちを、形容詞節を作る関係詞や、副詞節を作る接続詞とどう区別するか、複合関係代名詞を副詞節となる用法とどう区別するか、である。

・一番下の行の真ん中の列は以下のことを主張している。形容詞節として働くものには、関係代名詞と関係副詞、そして、これを文法的に形容詞というべきかには疑問の余地があるが、同格の **that** がある。ここで問題になる識別は、名詞節のところで述べたことと被るので繰り返さない。

・一番下の行の右の列は以下のことを主張している。副詞節として働くものには、接続詞と複合関係詞がある。接続詞については **if** と **when** に名詞節との識別問題があり、複合関係詞に関しては、複合関係代名詞についてのみ、名詞節との識別問題があるが、これらも当然ながら名詞節のところで述べたことを逆側から述べただけである。

☆英文解釈上、注意を要する言葉たち——これらに出会ったら立ち止まり、どの用法かを根拠をもって特定せよ

・it…前に出てきた人間以外の単数名詞を受ける代名詞／後ろに出てくる to 不定詞や that 節等を受ける形式主語・形式目的語／天気や時間などの文で特によく用いられる「漠然と状況を指示する it」／強調構文 it is…that

・that (詳細は「☆節を形成する That の識別のまとめ」参照) …指示代名詞 What is that? / 指示形容詞 That pen is mine. / 名詞節を作る接続詞の that。他動詞のあとや形式主語 it と対で登場することが多い／関係代名詞 that。名詞を修飾するものなので、名詞の直後にくることが多い、節内は名詞欠如文／同格の that。特定の名詞につき、その具体的な内容を説明する、名詞の直後にくることが多い、節内は完全文／強調構文 it is … that / so…that / so that…

・as…前置詞。「として」。後ろは名詞 / SVO as C の as、「O を C だと V する」／接続詞。比例 (…つれて) ・様態 (…ように) ・比較 (…と同じくらい) ・時 (…とき) ・理由 (…なので) ・譲歩 (…だけれども) / 副詞。原級比較の前の as のこと、後ろの as (接続詞) と呼応し、「後ろの as 以下と同じくらい」の意味をなす／関係代名詞? as 節のなかで名詞が欠けているものをこう呼ぶ、基本的に接続詞の「様態」の用法の変化形と捉えておけばよい。

・Ving…動名詞 (名詞) / 分詞 (形容詞) / 分詞構文 (「副詞」節や、and V の代用)

識別のためのヒント…S の位置、他動詞の直後の O の位置、前置詞の直後の前置詞の目的語の位置なら、名詞になる「動名詞」の可能性が高い／名詞の直後なら形容詞的 M となる現在分詞の可能性が高い、とくに O のあとなら C になっている現在分詞の可能性が高い／Ving~, SV あるいは …, Ving のように、主節 SV の前に Ving があるか、カンマで前と区切られて Ving が現れる場合、分詞構文。

・be Ving が 「be + 現在分詞」で「現在進行形」なのか、「be + 動名詞」で「S は動名詞することである」という SVC なのかは「文脈判断」。

・to V…名詞用法／形容詞用法／副詞用法 識別のためのヒント…S の位置・O の位置なら名詞用法／名詞の直後にあり、その名詞と SV 関係、OV 関係、同格関係をなしていたら形容詞用法／それ以外は副詞用法 (目的・結果・感情の原因・判断の根拠・条件・enough to・too to…)

・be to V が いわゆる「be to 不定詞」で予定・運命・可能等々の意味なのか、「be + to 不定詞の名詞用法」で「S は to 不定詞することである」という SVC なのかは「文脈判断」。

・what…疑問代名詞。「何」／関係代名詞。「こと・もの」。←どちらも名詞節を作り、二つは形では判断がつかない。意味から判断するという意味で文脈判断。どちらでとつてもいい場合もある。

・when…名詞節＝間接疑問、いつ／形容詞節＝関係副詞、…な (とき) / 副詞節＝接続詞、…なときに

識別のヒント…名詞節は SOC か前置詞の目的語となる。そのような場合は間接疑問、よく when 節を取り除いたら文が成り立たない (主要要素が欠ける) なら名詞節と言われる／when の前に時を表す名詞があったら、それを修飾する形容詞節を作る関係副詞の可能性高／when 節を取り除いても文型が成立していたら副詞節を作り M となる接続詞

・if / whether…if : 名詞節、…かどうか。副詞節、もし…ならば。whether : 名詞節、…かどうか。副詞節、…であろうとなかろうと。識別のヒントは when の名詞節・副詞節の識別と同様。

・前置詞句…形容詞として名詞にかかる M になるか / 副詞として名詞以外にかかる M になるか

識別のヒント…形容詞として働くときは基本的に直前の名詞を修飾する。つまり、直前に名詞がなければ副詞 / S の直後にある場合は、たいてい形容詞 / O のあとにある場合が難しく、副詞と形容詞との「文脈判断」が必要になることが多い。この場合には「動詞の語法」と関係している可能性に注意すること (例 : deprive A of B…)

☆節を形成する That の識別のまとめ

- ①名詞節を作る接続詞の that～：主に主語、目的語、補語になる。中は完全文。文を一個の名詞節にまとめる「箱」。
形式主語 It の構文の that もこれ。
→名詞節は基本的に主語か目的語か補語になるので文の主要要素が既に出そろっている場合には接続詞の that は出てこないことに注意。
- ②関係代名詞の that～。先行詞と呼ばれる名詞を修飾する形容詞節として働く。中は先行詞が欠けているため名詞欠如文。that は継続用法（非制限用法）はないので、前の名詞を限定する働きをする。
- ③同格の that～。特定の名詞に付き、その名詞の具体的な内容を説明する。形の上では名詞にくつつくという点で関係代名詞と似ているが、節中が完全文である点で異なっている。基本的な訳は「～という名詞」。関係代名詞との「形」の違いを理解して区別し訳し分けることが重要。
- ④強調構文の that～。It is 名詞 that 名詞欠如文。It is 副詞 that 副詞欠如文⇨完全文という形でのみ出現する。It is … that で挟まれた部分を強調する。強調構文は形容詞を強調することはないことに注意。
この点をチャート的に整理すると、
It is X that～
X が形容詞：X が補語になっている形式主語構文
X が副詞：副詞は補語になり得ないので強調構文
X が名詞：～が完全文→X が補語になっている形式主語構文
～が名詞欠如文→X が強調されている強調構文
or It が前を受け X は補語で that は関係代名詞
この最後の「or」は文脈でしか判断できない。
- ⑤関係副詞の代用の that。関係副詞 why, how, when, where の代わりに that を使うことが出来る。関係副詞に特徴的な先行詞、reason, way, time, place の後に that と完全文（正確に言えば副詞欠如文）が続いていれば、この可能性を考える。
- ⑥so/such … that～構文の that。「とても…なので～」 「～なほど…」などと訳す。前者の場合 that 以下(～)は「結果」を示し、後者の場合 that 以下(～)は程度を示しているので「結果・程度」の副詞節を作る接続詞と言われる。基本的にどちらで訳しても可。
- ⑦so that～。上との違いは so と that が離れていないこと。こちらは「そして～」(結果)あるいは「～するために」(目的)の意味を持つ副詞節を作る。どちらなのか判断する必要がある。形の上での特徴は以下の通りだが絶対ではない。
結果：, so that～ 前にカンマがある
目的： so that～may/will/can カンマがなく助動詞を伴う。
- ⑧感情の原因を表す to 不定詞と同じ働きをする that 節。I'm afraid that…など。感情を表す言葉のあとにくる。形容詞を修飾するので副詞節となる。